

第 14 回 J N T O 同窓会開催報告

日 時：2019年6月22日（土）16：00～19：30

場 所：慶応大学三田キャンパス南校舎3F [萬来舎]

参加者：10名：佐久間健治、川井仁史、山之内保、石井昭夫、北出明、井久保利信、
上村仁、桜井秀夫、日柴喜幸子、間宮忠敬（特別会員）

会 費：2,500円

次 第：

1. 開会と連絡（北出代表幹事）

- ・今回は JNTO 同窓会第 14 回目の会議で、令和になって最初の会合。本日はわが同窓会の設立趣旨でもある「温故知新」（古きをたずねて新しきを知る…）にちなんで、川井仁史さんの来し方を JNTO の関連でいろいろ語っていただくことにしました。大先輩の佐久間さんが川井さんのお話を是非聞きたいと、初参加して下さったのは嬉しいこと。
- ・JNTO 同窓会会員名簿は限られた人たちだけなので、前回の会合で広く職員の年次別のリストを作ってみようという話が出た。田中五十一さんに作成を依頼し、彼がまとめてくれた中間報告的なリストをお配りする。石井さん、日柴喜さん、赤司さんの協力もあった。①古い年次のものは 1993（平成 5）年 4 月現在の在職者リストから補充したので、それ以前に退職、死去された方は入っていない、②事務補助員の方は入っていない、③観光部などから移籍された方が入っていない、など不十分なので、プライバシーの問題に配慮しつつこれを補い、退職年を入れるなど加除訂正していきたい。見ていただいて気付いた点をお知らせください。引き続き田中五十一さん、日柴喜さんに取りまとめをお願いします。
- ・初参加の佐久間さんが恒例により簡単に自己紹介的に挨拶（内容はまとめて後記）。

2. 川井さんのお話

- ・配布されたリストを見て、JNTO 在勤中、東京本部に勤務した期間が少ないことに今更ながら驚いている。1959（昭和 34）年に入社し、1963（昭和 38）年に NYC（1963～67）勤務に出て、その後も YYZ（1971～76）、SYD（1982～86）の所長を勤めた。さらに PATA のアジア支局長としてシンガポールに勤務（1987～91）した後、ジェノバ博（国際海と船の博覧会）の事務局長（1991～92）でも海外で勤務した。JNTO に復帰してからも定年退職まで京都 TIC 所長（1993～97）を務めたので、本部に勤務した期間が短く、とくに後半はほとんどなかった。1997 年に定年退職した。JNTO 在勤時代については別に機会があればお話しするとして、本日は退職後にしてきたこと、今していること、自分を形成してきた生い立ちについて少しお話させて頂く。

【退職後の海外での活動】

- ・1997 年 1 月に定年退職し、その年の 4 月から 2 年間 JICA の専門家（観光）としてカイロのエジプト政府観光開発庁に派遣された。ところが同年 9 月にカイロの考古

学博物館、11月には日本人観光客も多数犠牲になったルクソールのハトシェプスト女王葬祭殿でのイスラム原理主義者によるテロが起り、エジプト観光は壊滅的な打撃を受けた。そのため、日本人や東アジアからの訪エジプト旅行者を増やすこととエジプトの観光開発についての助言が求められていたと思うが、観光開発にあたって豊かな自然、文化遺産を破壊することのないよう繰り返し助言するほか、具体的なことは何もできなかった。しかし自分にとっては、イスラム圏での生活を体験しながら豊かな古代エジプト文明の遺跡と自然遺産（海洋と砂漠）に触れることができ、アラビア語（古典及び現代）の勉強までできた貴重な体験だった。

- ・帰国後1年間の準備期間を経て、静岡県にある短大で同時にアメリカのフロリダ州の4年制大学として認められている大学で、観光（ホスピタリティ）と日本語、英語を教えることになった。準備期間中に以前から関心のあった日本語教授法を新宿の朝日カルチャーセンターで受講しはじめ、のちに日本語教育能力試験に合格して一応日本語教師を名乗れるようになった。大学には中国人留学生も多く、日、英、中国語を駆使して国際的に活躍できる人材を育成する夢があった。日本人学生は1年間アメリカ、フロリダ州のボカラトンのキャンパス（提携先の大学）に留学することになっており、私も学生の指導ということで1年間同大学の学生寮の教授用の部屋に滞在し、久しぶりにアメリカの生活、それも懂れていたキャンパスライフを楽しむことができた。しかし、同大学（短大）は学生が集まらなくなり募集を停止し、在校留学生は他大学に編入となり、私も退職した。これが2004年（平成16）年3月、67歳の時だった。フリーになったので言語教育を志し、外国に語学の勉強に行ったり、あちこちで日本語を教えたりしていた。
- ・教えるほうは、2007年（北京オリンピックの前年）に北京理工大学でITを専攻した全国の大学生、大学院生で日本企業や日本で働くことを希望している者を対象とする初歩からの6か月間の集中コースで日本語を教えた（井久保北京事務所長にお世話になった）。大学で教えたのだが大学の教員ではなく、人材開発会社が企画した6か月の養成コースの授業が大学で行われたもの。報酬は現地の語学教師並みと承知していたから、交通費と住居は提供されたものの、生活水準は知れたものであった。住居も本来外国人の住めない中国人専用の団地だったが、かえって普通の中国人の生活に触れることができた。日本レストランに置いてあった現地日本人向け情報誌の求人広告を見たら、現地採用の日本人女性の給与のほうが高いくらいだった。給料に頼っているわけではないので、週末には外国人の利用するデラックスホテルやレストランで贅沢を楽しんだ。教えた生徒の中には日本で起業して成功している者もいる。
- ・次いで、フィリピンのスービックベイで日本語を教えた。住居だけは提供されたが、交通費も生活費も自分持ちというボランティア仕事だった。日本人を主とする老人ホームで働いている看護師、介護士の女性たちが相手で、みな勉強熱心だったし、いい人たちだったが、看護師、介護士の資格を取るには漢字を覚える必要があり、大変だった。この施設は今はない。
- ・2010年4月から3か月間、交通費と住居を提供され、現地の外国語教師並みの報酬

をもらって、ベトナム、ホーチミン市の技能実習生のクラスで日本語を教えた。彼らは学歴はないが、日本に稼ぎに行かなければならないから必死だった。私は日本語を教えるだけだったが、日本の会社文化を教えるので、朝はラジオ体操から団体規律、教室の清掃なども教えることになっており、これは日本の高校の教頭をしていたとかいう人がやっていた。日本では農業、水産業、建設業、道路工事、食品工業、冶金などの分野で厳しい仕事をするわけだが、選考を経てきているだけに真面目で熱心、中には大学に留学させてやりたいと思うほど理解の鋭い人もいた。ここでもリッチな外国人観光客の真似をして楽しんだほか、学校のスタッフと普通のベトナム庶民の国内旅行を楽しむなど、貴重な体験をした。生徒の中には日本に来て9年になり、道路工事の仕事ぶりを認められて正社員になり、ミャンマー人やバングラディッシュ人を監督する仕事をし、ボーナスも出るようになったと報告してくれた者もいた。

- ・そのあと、マレーシアのカメロン・ハイランドの日本語教室で現地に日本語を教えることをはじめた。ここは英国人が開発したリゾートで、一年中快適な気候なので長期滞在してゴルフやテニス、散策を楽しむ日本人も多かった。彼らが土地の人たちに感謝し交流を図るために始めた日本語教室だったが、今では日本人長期滞在者と直接関係はなくなったが、毎年1～2か月日本語を教えるかわら土地の人たちと交流しつつ休暇を過ごすということをここ10年続けている。日本語教師仲間は自身と家族の高齢化などのため減少して困っている。アマチュアのボランティアの集まりなので、興味のおありの方は参加してほしい。

【国内での活動、その他】

- ・地域の多文化共生社会に関心があり、応募して大田区の多文化共生推進協議会の委員を去る3月まで2年間務めた。国が労働力として非人道的な実質移民を進めながら、地域での問題は自治体任せにしている無責任な体制がある。今現在、居住外国人のためにボランティアで主として日本語教育の支援事業をやっている。ベトナム人技能実習生たちに英語を教え、バングラディッシュ人のイスラムの導師に日本語を教え、区立中学校の英語の土曜補習クラスも手伝っている。最初に日本語を教えた中学生(中国人)が高3になり、今は大学受験の英語を教えている。誰かがやらなければと思っていろいろやっている。こうして知り合った人たちとは心の通う付き合いが続いている。
- ・以前から外国の不幸な境遇の子供たちの援助に関心を持ち、国際慈善団体で翻訳のボランティアをしていたが、今は特定非営利法人チャイルド・ファンド・ジャパンで翻訳を続けている。第二次世界大戦後、日本の戦災孤児を支援する米国ほかの民間団体からの支援を受け入れるための団体だったが、日本の経済成長とともに支援の受け手から担い手になり、現在フィリピン、ネパール、スリランカの子供たちを支援している。国連の「子どもの権利条約」に賛同し、子どもたちの権利が守られ教育を受けることができるようにこれらの国で活動している。私も他の支援者と一昨年はフィリピン、昨年はネパールの寒村のコミュニティを訪ね、支援している子どもたちに会い、彼らの学校を訪れた。PATAの時から親しんだこれらの国々だが、当時慣れ親しんだ社会階層の上方の人たちのライフスタイルとはまったく違う環境で貴重な経

験をした。

- 自分の勉強について。かつて英語のほかに、フランス語、ドイツ語など欧州語をやったが、その後外国と接することが増えてきて、アジア語とかあまり人のやらない言葉も勉強するようになった。中国語については、JNTO 在勤中で仕事で行くことは考えられない時期に南京に中国語短期留学を試みた。退職後は毎年夏に中国各地に短期留学して観光もするという集まりに参加している。大連、上海、ハルビン、青島、成都、西安、桂林、ウルムチ、昆明、済南、西寧など大学の学生寮に4週間程度滞在して近郊周辺への旅行も楽しんだ。残念ながら今この集まりは中断している。
- 韓国にもほぼ毎年ソウル大学の短期留学コース韓国語学校の夏の短期コースに参加して韓国語の勉強のほかに観光地に行ったり、ミュージカルを見るなど、韓国の新しい情報を仕入れている。アジア以外では通っていたアテネフランセから地中海岸のアンチーブのフラン語学校に行ったこともある。ここでは欧州諸国からの若者たちとも知り合えて楽しかった。今は実際に役に立つアジア諸言語を学びたいと思い、上智大学で始めたインドネシア語を慶応外語で受講している。
- NHK ラジオの外国語講座は英語以外の外国語講座は全部録音して聴いている。忘れるから毎年聞いている。語学試験を受ける趣味があり、JTB の語学試験、英検などの語学試験は色々受けて級をもらっている。ヘブライ語とサンスクリット、古代ギリシャ語なども学んでみようかと思っていたが、やはり現代の異文化共生の仕事に役に立つほうがいいと思って今は現代の外国語をやっている。国際交流に関心があったから ICU に行き、JNTO に入った。自分の生き立ちが関係しているだろうと思う。

【生き立ちなど】

- 生まれは京都の伏見で小中学は敦賀市。4人兄弟。生まれた時から核家族で祖父母はほとんど知らない。終戦時は国民学校3年生だった。戦争中は銃後の小国民教育を受けた。敦賀は20年7月に爆撃を受けた。父は電気技師で変電所に避難していた時焼夷弾が落ちてきたが、幸い不発で助かった。北出さんが紹介したユダヤ人輸送の話は知らなかったが、外国航路があることは知っていた。ロシア領事館の建物があったのは記憶している。旧制敦賀商業は野球が強かったが、ロシア語の教科があった。高校は父の転勤で福井市に行ったが、敦賀のほうが国際的な雰囲気があった感じ。
- 兄は1929年生まれで、東京外事専門語学校（今の東京外大）に入ってドイツ語を勉強していた。正清敬之助さんと同じクラスだったそうだ。私にとって国際交流への思いは兄が手本。ICUに入り、外国に行くチャンスがありそうだと感じて JNTO に入った。初任給12,800円だった。
- 父の転勤であちこちに住み、JNTO 在勤中も退職後も外国になじんできて、自分には故郷がないに等しい。寂しいと言えば寂しいが自由で縛られることもない。私の娘たちになるとなさらで、NYで生まれ、カナダで学校に行き、オーストラリアにも住んだ。一人は中国人と結婚したからさらに日本離れした国際人だ。
- 両親がクリスチャン（プロテスタント）だったから、私も信徒になっているが、信仰心はあまりないほう。それでも聖書などは教養として身につけるし、家庭の催事はキ

- リスト教に従っている。信仰というよりファミリー・トラディションのような感覚だ。
- ・外国に行って日本との違いで気が付いたこと。①日本はトイレが多くてとてもきれい、②日本にはゴミ箱がない、③街路に休憩するベンチがないし、ホテルにも無料で座るベンチ少ない、④電車の IC カードにメリットがない（韓国、シンガポール、豪州は割引あり）、⑤警察に外国人を採用しない、など。
 - ・「ニーハオ！ アンニョンハセヨ！」の配布。2004年にICU同級生の自分史的思い出文集をつくった時の寄稿文。今日の話も含む語学の勉強や外国語を使っのボランティア活動などについても書いている。

3. 佐久間さんの挨拶&自己紹介（川井さんの話へのコメントを含む）

- ・川井さんとは EATA、PATA、ニューヨーク事務所など同じような仕事をしたが、その割にすれ違って接触が少なかったから、今回は会って話を聞くチャンスと思って来た。社会問題になっている外国人居住者の扱いとか、異文化共生問題に今も直接的に関わっているなんて立派だと思う。外国語に対する強い関心は知っていたが、言葉への関心にとどまらず、日本の重要な課題と取り組んでいることに感心した。大田区での活動も聞いていたが、素晴らしいエネにルギーだ。
- ・自分とは生い立ちが大違い。私は山形県庄内地方の農家に生まれた。戦争ごっこに明け暮れる軍国少年だった。終戦時は旧制中学2年生。終戦を境に、天皇陛下のために鬼畜米英と戦えと言っていた先生が、手のひらを返して自由だ民主主義だとか言い出したので、徹底的に先生不信感に陥った。兄二人が戦死。一人はルソン島で、一人は満州から南方に送られる輸送船がニューギニア近くで沈没させられ戦うことなく戦死。衛生兵だったので、海上で治療を受けて助けられたという同僚の兵士が10人ぐらい山形の家を訪ねてきたことがあった。満州から南方に向かったことは韓国の市民が手紙で知らせてくれた。日本語で非常な達筆だったので覚えている。同じ村に、自分がいかに勇敢に戦ったか、ほかの連中がいかに臆病で死んでいったかを話す復員兵士がいたが、そういう話は嫌だったし、信用できなかった。
- ・新制高校に切り替わって鶴岡工業高校になった。専攻科別のクラス編成なので、6年間クラス替えがなく、団結力は強かった。組織的にカンニングしたり、それができなかったときはそろって白紙を出すなど。団結のエネルギーは教師に対する反抗に向けるだけだった。
- ・昭和26年3月、成績は悪かったが留年や退学はなく、卒業はした。電気関係会社をいくつか受験したが採用してくれるところはなかった。縁故で三菱電機東北支社に内定したが、電気科に6年在籍しながら電気の勉強は全くしなかったのが気乗りしなかった。3月末だったと思うが、横浜税関職員採用試験が酒田税関支署であり、受験して合格した。貿易が増え始めた時期で、人が必要だったのだと思う。最初は横浜税関、その後東京税関、羽田の税関でも勤務した。税関なら工業高校電気科卒という経歴が災いすることもないだろうと思っていたのだが、電気関係整備品・製品の輸出入との関連で、電気科卒なのにこんなことも分からないのかと言われてたり、思われたりすることが少なくなかったので辞めることにした。

- ・昭和 34 年 4 月東京都大田区六郷小学校に事務職員として勤務。昭和 38 年に JNTO の採用試験を受けてオリンピック開催の 1964 (昭和 39) 年に入社した。試験では黒須さんが一緒だった。税関時代も英語など大してしゃべらなかったのに、いきなり TIC 東京案内所での勤務から始まった。オリンピック後は編集部のオフィシャル・ガイド編集班に回され、塩澤さんたちと校正業務に追われた。出張校正で缶詰作業をさせられ、はじめこそ飯の量が少ないとぼやいていたのに、座って作業ばかりしていたため食欲が減退してちょうどいいくらいになった。
- ・そのあと 1965 (昭和 40) 年 11 月に、吉沢新一さんの後任で羽田 TIC 勤務になり、1967 年 10 月の IUOTO の国際会議と国際観光年の VIP の往来を羽田でテイクケアした。この時期に労働組合の結成を準備して IUOTO 会議の直後に旗揚げし、初代労組委員長になった。再選されたが、翌 1968 (昭和 43) 年 6 月にダラス分室長の内命が出て赴任した (~s51.5)。ダラスから帰国して EATA の事務総長を 4 年務め、二度目の海外勤務で NYC に行った (s51.6~55.5)。
- ・1987 (昭和 62) 年に JNTO 国際協力部長を辞めて、横浜国際平和会議場常務取締役役に転出した。
 - 佐久間さんの税関勤務の話から、入国審査、検疫、税関のいわゆる CIQ の国際比較などの話が弾んだ (省略)。

4. 自由懇談 (記録担当)

1) HP について (石井)

- ・作っただけで更新をあまりしていないが、今後原則として月末に定期的に更新することにしたい。例えば今回の会合の記録を月末に掲載し、次回の会合が決まれば入れておくとか。ほかに「観光同人」のように、自由に書いてもらってそれを掲載することも考えられる。皆が好きなことを書いたり、過去のもので紹介したい記事などを載せて賑やかにする、とか。(6 月末の更新は事情によりできませんでした！)

2) 海外での生活等について

- ・今回会合のご案内にはいくつか仮テーマを挙げておいたが、「日本政府観光局の物語」の原稿が進んでいないため、意見交換として採り上げる準備ができなかった。川井さんの話に絡んで、皆さんの海外での生活の話をお聞きしたい。個人的な旅行とかバカンスはどんなふうにご覧されましたか。
- ・(川井) NYC にいた時アイスランド航空でヨーロッパに行った。一番安かったから。プロペラ機を使っていてレイキャビックに飛んだ。ここからルクセンブルグに行き、ユーレイルパスを使ってヨーロッパ内を鉄道で回った。パリでは山之内さんに世話になったし、ジュネーブでは住田さんと泉さんにお会いした。ドイツやイタリアも回ってルクセンブルグに戻り、来た道をたどってアメリカに戻った。楽しいバカンスだった。ほかにバハマなどのリゾートには 1 週間単位の滞在型パックツアーで行った。パックといっても飛行機の中だけ一緒に、自由にリゾートで過ごして帰ってくる個人旅行だった。退職してから JTB のツアーでイギリスに行き、コッツウォルズとか湖水地方などを回ったが、回遊型のパックツアーは自由がなくてつまらなかった。だから次はパックは

止めてにパリに長期に滞在して自由に回る旅行をした。ほかにはリパークルーズを楽しんだ。ラインクルーズ、ドナウ・クルーズ（去年）など。生涯あちこちに行ったのでご参考までに過去のパスポートなどを持ってきた。昭和 38 年の NYC 赴任の時には大平正芳首相の署名がある。「身分証明書」というのは占領下の沖縄に渡航したときのもの。ほかに公用旅券、イエローカードなども回覧。

- ・ **(佐久間)** ダラスとニューヨークにいた間にバカンスでアメリカ 50 州のうち 7 州を除いて全部ドライブ旅行で踏破した。そのためにステーション・ワゴンを買った。州によって制限速度は違うがおおむね時速 100 km 程度だったからひどく時間はかかった。西海岸まで 2500 km ある。サヴァナからダラスに 1 日で片道 1,000 マイル (1,600 km) 走ったこともあった。アメリカだけでなく、トロントにも行って山之内さんに世話になった。
- ・ **(日柴喜)** バンコクに勤務したとき、バカンスを利用して戦時中から敗戦にかけて祖父が辿った道を跡付けてみた。祖父は敗戦濃い時期に名古屋から 5 か月くらいかけてシンガポールに行き、インパールまで行った一人。上官がいい人で、戦争は負ける、犬死しないよう早めに脱出しようと、降伏前に出発し、3 か月かけてヤンゴンから徒歩でタイを経てシンガポールまで苦難の逃避行をした。どこの軍隊に投降するか考えてイギリス軍に降伏して命が助かった。バリ島近くの小さい島で 2 年間捕虜生活を送り、自分たちで食べ物を栽培して食いつないだ。その島にも行ってみた。祖母経由で聞いた話などをもとにできるだけ跡を辿ってみようとしたのが私のバカンス。しかし、本当に逃避行した道はととても歩けるような道ではなく、ところどころ車などで行ってみた程度。
- ・ 以上の 3 人のバカンスの話に関連して参加者の様々な経験やコメントが寄せられ、賑やかだった。日柴喜さんの話が導火線になって、敗戦から戦後にかけてのアジアの状況などが語られた。戦死と言っても実情は病死だったり、餓死だったり…、戦争の話は美化されたものが多く、悲惨な話は口にされなかった…、太平洋戦争の始まりは真珠湾ではなく、マレーシアのコタバルだった…。戦争経験者は話したがらないし、直接聞いたのは我々の世代までで終わり、あとは風化してしまう…、など。

3) 間宮さんの感想等 (1981 年から 5 年間日本郵船のニューヨーク支店に駐在)

- ・ 川井さんのお話大変面白く拝聴した。私は 2007 年 JNTO の理事長に就任したが、印象としてとくに年配の人たちに一芸に秀でた人がおられ、人材も多様だと思った。営利目的の組織でないことから来る「育ち」もあるかもしれない。観光宣伝となるとジェネラリストが求められる傾向はあるが、特異の能力の持ち主も必要だと思う。
- ・ ある時職員が使える言語を調べたら、アラビア語やスウェーデン語も含め 10 数か国語もあったので驚いた。JNTO は 100 人ほどの陣容なのにこんなに多言語が使えるとは凄い語学集団だと思った。今でこそ誰でも外国に行け、外国語を使う機会はいくらでもあるが、初期のころは外国に興味を持ち外国語を使って働きたいという人の受け皿が少なかったからかもしれない。
- ・ 川井さんが話されたトイレとベンチについて同感。丸の内の通りにベンチが置かれたが休むためにベンチは必要と思う。ごみ箱がない話もまったく同感。ゴミ箱はかつて爆弾テロがあったころに置かれなくなったが、外国にはあるのだから管理が問題。改善が必

要と思う。あと時計と方角表示も外国人旅行者のためにはあったほうがいいかと…。

4) 語学の奨励など

- ・初期の頃外国語の習得のために JNTO から補助が出ていて、語学学校に通学ができたから、それぞれが選んで外国語を学んだ。JTB には語学検定試験があり JNTO のスタッフも受験を奨励された (川井)。
- ・IUOTO が観光学の基礎のような通信講座を始めた。最初の受講者が川井さんと私 (山之内) だった。西川さんが無理しなくてもいいというようなことを言ったので、ほっておいたら観光部の人たちも受講していて、当時の間島理事にひどく怒られた。急いで講座の毎回分を全部書いて提出した。川井さんはどうしたのかと長らく思っていた (山之内)。ちゃんと出した (石井、井久保)。佐藤、沢田両君は出したが、自分が出さなかったために翌年だったか自費で受講して提出した (北出)。

5. 次回について

- ・8月31日(土)11:00~で会場の予約が取れたので開催する。ご案内は後日に。
- ・川井さんの話は大変面白かった。会員の「プティ私の履歴書」を残してもらうのも面白いので今後も企画したい。
- ・自由懇談は幹事の準備不足で予定通りにはいかなかったが、海外での仕事やプライベート生活に関し、JNTO/OB/OG ならではの世界を駆け巡る経験談などに花が咲き、3時間半があっという間に過ぎた。
- ・北出幹事から1931年に東京で生まれ、戦時中の日本で育ちアメリカに帰ったユダヤ人の著作「江戸っ子」の紹介があった。日本語版の翻訳をするかもしれない。

文責 石井昭夫